

尾張旭市

タイトル

尾張旭市の行政計画と具体的な事業のSDGsによる発展



(関連するゴール 1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、11、12、13、14、15、16、17)

項目	内容
地域	<p>愛知県尾張旭市</p> <p>尾張旭市は、名古屋市に隣接し、日本のほぼ中央に位置している。世界的に有名な自動車メーカーTOYOTA本社のある豊田市にも近い立地にある。</p> <p>人口は約8万3千人、面積は約21km²とコンパクトであるが、大都市近郊でありながら緑豊かで自然も多く、バランスがとれた住みやすいまちである。</p>
背景	<p>日本では、近年、急速に高齢化が進展しており、健康寿命を延伸させ、元気で長生きできる環境づくりが求められている。</p> <p>WHOは、SDGsの中心に目標3、ヘルスプロモーションを位置付け、17の目標と関連付けながら目標達成に取り組むことを促している。</p> <p>尾張旭市は、WHOが提唱する「健康都市」の理念に賛同し、2004年6月に健康都市連合の設立メンバーとして加盟を承認された。</p> <p>その後、市の最上位計画である総合計画と連動させる形で、健康都市施策のガイドラインとなる「尾張旭市健康都市プログラム」を策定し、体の健康・心の健康・まちの健康の増進に、総合的に取り組んできた。</p> <p>2015年に国連でSDGsのアジェンダが採択されて以後、その内容について研究を行い、2018年にはその考察を取りまとめ、行政活動の参考とするとともに、発信を行っている。</p>
プラクティスの目的	<p>尾張旭市では、市が進めてきたまちづくりが、SDGsとどのように関連しているかについて整理・考察し、今後のまちづくりに活かすこととした。</p> <p>考察は、①計画とSDGs、②具体的な事業とSDGsの2つの視点で行った。</p>

	<p>①の視点の考察では、総合計画及び健康都市プログラムは、SDGsの持つ特徴と共通点が多く、また、SDGsの17の目標と幅広く関連することが明らかになった。このため、市が各種の行政計画の見直しを行う際に、SDGsの視点を加えることで、計画の質そのものを向上させることができることを理解できた。</p> <p>②の視点の考察では、尾張旭市が2008年度から10年間取り組んできた「あさひ健康マイスター事業」について、SDGsとの関連を考察した。この事業は、10年間の取組の中で対象を拡大しており、その結果、SDGsのより多くの目標達成に寄与することが明らかになった。このことから、具体的な事業の立案や見直しの際に、SDGsの視点を加えることで、より効果的・効率的な事業の実施ができることが理解できた。</p> <p>これら2つの考察はいずれも、尾張旭市が独自に地域の課題と向き合い、計画し、取り組んできたことを、SDGsという世界基準の視点で再評価したものである。この再評価のプロセスそのものに価値があるだけでなく、今後のまちづくりにも大いに活用できることが認識できた。</p>
<p>主要ステークホルダーとパートナー</p>	<p>計画の策定や具体的な事業の実施に当たっては、常に多くの団体、市民、企業、学校などと連携を取って進めている。この背景には、総合計画の中核をなす「基本構想」で、「市民との協働で進めます」といった基本的なまちづくりの姿勢が明記されるなど、SDGsの目標17、パートナーシップを基本とするまちづくりの理念が、古くから地域の文化として根付いていることが理由として挙げられる。</p>
<p>プロジェクトの実施/活動</p>	<p>SDGsとの関連を考察するため、次の2つの視点で考察を行った。</p> <p>①計画とSDGs</p> <p>総合計画及び健康都市プログラムは、いずれも計画期間を10年間で定めている。これらの計画の策定、そして具体的な事業の実施に当たっては、現状や目標を数値で測定する「行政評価」の仕組みを活用して、マネジメントサイクルを回している。</p> <p>行政評価の仕組みでは、住民の意向や各種の統計データを毎年把握し、評価を行っている。この結果に基づき、市の予算措置や人員配置といった資源配分を行うとともに、市以外の主体との役割分担について見直しを行っている。この結果は、毎年、詳細にわたって公表しており、様々な主体とのパートナーシップを進める</p>

	<p>上での基礎となっている。</p> <p>②具体的な事業とSDGs</p> <p>「健康都市プログラム」のもと、2008年から継続的に進めている、「あさひ健康マイスター事業」を取り上げ、SDGsとの関連を考察した。この事業は、健康づくりの活動を行う市民にポイントを付与し、一定のポイントを獲得した市民を表彰する事業である。事業の目的は、継続的に健康づくりに取り組むためのきっかけづくりである。2009年に行った最初の表彰では、22人の市民を「健康マイスター」として表彰した。2018年には、表彰者が約6倍の130人となるなど、年々、健康づくりに取り組む市民が増加している。なお、2018年4月には、10年連続で表彰を受けることとなった市民10名を「ゴールドマイスター」として特別表彰した。</p> <p>市が進める「健康都市」のまちづくりの象徴的な事業の一つとなっている。</p>
<p>結果／アウトプット ／インパクト</p>	<p>①計画とSDGs</p> <p>総合計画及び健康都市プログラムは、将来あるべき姿から発想する「バックキャスティング」の考え方で策定している。また、数値目標で進捗状況を管理する仕組みを導入するなど、SDGsと共通点が多く、SDGsの特徴を先取りした取組といえる。</p> <p>また、総合計画・健康都市プログラムとSDGsの関係を整理すると、SDGsの17の目標全てについて、市が取り組んでいることと、それぞれの取組が幅広く関連することが明らかになった。(画像ファイル1参照)</p> <p>②具体的な事業とSDGs</p> <p>2008年度の事業開始当初は、参加者に「チャレンジカード」を配布し、健康講座やウォーキングなどの12事業に対してポイントを付与していた。この事業の内訳をSDGsの視点で見ると、3、12、13の目標達成に貢献するものであった。</p> <p>我々は、この事業の効果向上を図るため、2017年度に大幅リニューアルを行った。これに伴い、対象事業数は当初の12事業から119事業と約10倍に、また、カード形式ではなく45ページの手帳の形で配布することとした。</p> <p>このリニューアルにおいては、自治会や町内会活動、ボランティア活動などを幅広く対象とした。健康づくりのポイント制度を導入している自治体は日本に多くあるが、自治会や町内会活動を対</p>

	<p>象としているところは少ない。体だけでなくまちの健康を目指す尾張旭市ならではの、特徴的な取組である。</p> <p>このリニューアルにより、SDGsの視点では、3、4、5、7、10、11、12、13、16、17といった、より多くの目標達成に貢献する事業となった。</p> <p>また、ポイント達成者の中から抽選で当たる記念品の提供を、企業等から募ることにより、SDGsの8や9の目標達成にも、波及効果が期待できるようになっている。</p> <p>さらに、2018年度からは、こどものうちから健康づくりに取り組めるよう、こども専用のページを手帳に設けるとともに、教育委員会と連携し、市内の全ての小学生・中学生の事業への参加を促した。これは、SDGsの「誰一人として置き去りにしない」という理念と合致した取組といえる。</p> <p>市の取組を、住民が独自にアレンジして、さらなる活用を図る取組も始まっている。2018年には、100数十世帯で構成される一つの町内会が独自で、町内会員に健康マイスター手帳を配布し、町内会が行う健康づくりの事業への参加を促す取組が行われた。この町内会では、地域の高齢化やつながりの希薄化に問題意識を持ち、この取組を始めたとのことであり、町内会の活動への参加者増加につながっているとのことである。今後、他の自治会・町内会への波及も期待される。(画像ファイル2参照)</p>
<p>可能にした要因と制約</p>	<p>事業開始当初、あさひ健康マイスターの表彰者には、市が記念品を購入して贈呈していた。記念品の贈呈は、参加者のモチベーション向上、参加者数の増加に寄与しているが、事業の継続と拡大により、より多くの財源が必要となった。このため、2017年度からは、事業の趣旨に賛同する各種団体・企業に協賛を募ることとし、市の財源を使わない形で、表彰者への記念品の調達を行っている。</p> <p>この際、協賛いただいた企業名を、市がWEBサイトで公表するほか、ポスター・チラシなどを広く配布してPRしている。協賛者には、イメージアップにより顧客拡大を図ることができるメリットがあり、ひいては地域産業の振興や経済成長にもつながる仕組みとなっている。</p>
<p>持続可能性と再生可能性</p>	<p>高齢化が進展する中で、健康の維持・増進に関する関心は高まる傾向にある。こうした中、尾張旭市が健康都市を目指していることを知っている市民の割合は、2006年に約50%であったも</p>

	<p>のが、2017年には約75%まで増加している。</p> <p>総合計画及び健康都市プログラムは、10年間の計画の中間年次を迎えており、2019年度に見直しを行う予定である。この見直しでは、SDGsの視点を加味して行うこととしている。これにより、計画と事業実施の両面において、高い効果が期待できる。また、日本の自治体には、「あさひ健康マイスター事業」と同種の事業を行っているところが多くある。しかし、その多くは、事業開始当初の「あさひ健康マイスター事業」と同様に、対象が限られたものに留まっている。尾張旭市の取組を参考にすることで、さらなる事業効果の拡大、ひいてはSDGsの目標達成に寄与できると考えられる。</p> <p>このため、2018年7月に千葉県松戸市で開催された健康都市連合日本支部大会において、本稿で述べた内容について、37の加盟自治体に向けて発表を行った。また、同年11月には、千葉県柏市において、自治体や企業関係者に対する講演を行うなど、本市の取組を広く発信している。</p> <p>さらに、国外の自治体に対しては、2018年7月にタイ、9月にマレーシアから本市を訪れた行政視察団に対して講演を行った。また、同年10月にマレーシア・クチン市で開催された健康都市連合国際大会に参加し、SDGsをテーマに3つの講演を行った。この国際大会では、SDGsに関する論文で表彰を受賞するなど、国際的にも、尾張旭市の健康都市の取組を通じたSDGsの目標達成の取組を発信している。</p> <p>本市の取組が世界中で共有され、SDGsの理念と目標達成に向けた取組が広がっていくことを期待したい。(画像ファイル3参照)</p>
結論	<p>以上のとおり、2つの視点での考察により、尾張旭市の進めている健康都市づくりとSDGsの目標は、親和性が高いことが分かった。このことは、尾張旭市だけでなく、他の自治体においても、広く参考になると考えられる。</p> <p>SDGsの視点をまちづくりの視点に取り入れることにより、新たな発想が生まれ、その結果、SDGsの目標達成に自ずと向かうことになると考えられるため、尾張旭市での今後の行政活動に広く適用させるとともに、今後も他の自治体に向けて発信をしていく。</p> <p>市民の健康を守るためには、健康に対して無関心な人々、無関心</p>

	<p>層へのアプローチが、今後ますます重要になる。健康に関心のある人も、そうでない人も、住んでいるだけで知らず知らずのうちに健康になる、そうした環境を創ることが健康都市のまちづくりである。</p> <p>健康都市のまちづくりをSDGsの視点とかけ合わせて取り組むことで、あらゆる世代の人が取り残されない、いつまでも住み続けられるまちを創り上げていくことができると考える。</p>
<p>実施に必要な資源</p>	<p>本市の行政組織には、健康の維持・増進を担当する部署として、「健康福祉部」がある。しかし、「健康都市」の取組は、他の行政組織にも幅広く関連するものであり、横断的な取組が必要となる。</p> <p>そのため、WHO西太平洋地域事務局が2000年に策定した「健康都市プロジェクトのための地域ガイドライン」に基づき、健康都市施策を推進する担当部署として、市全体の政策を統括する部門である「企画部」に「健康都市推進室」を設置している。スタッフは4名と少数であるが、専門的に組織間の調整を担う部署を15年にわたり設置しており、継続的・横断的な取組が可能になっている。</p>
<p>連絡先</p>	<p>尾張旭市健康都市推進室 谷口洋祐室長補佐 healthycity@city.owariasahi.lg.jp 0561-76-8101</p>
<p>その他の情報源</p>	<p>尾張旭市が表彰を受賞した、健康都市連合のWebサイトのURLは次のとおり。</p> <p>http://www.alliance-healthycities.com/htmls/awards/index_awards.html</p> <p>表彰名：WHO表彰ベスト・プラクティス賞 論文タイトル：住民参加によるアクセシブルなまちづくり 論文の概要：鉄道駅のバリアフリー化、市営バスの運行、土地区画整理事業、多様な住民参加、計画と数値目標、SDGsとの関係</p>